

Title	著者リプライ：『巡礼の文化人類学研究：四国遍路の接待文化』： 書評論文リプライ
Sub Title	
Author	浅川, 泰宏(Asakawa, Yasuhiro)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2009
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.14 (2009.) ,p.127- 128
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20090000-0127

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

著者リプライ

『巡礼の文化人類学研究—四国遍路の接待文化—』書評論文リプライ

浅川 泰宏

最初に、拙著を書評対象に選定された編集委員会と、多忙にも関わらず書評を引き受けられた原淳一郎氏に感謝申し上げたい。原氏は参詣史の大著『近世寺社参詣の研究』（2007）を刊行された気鋭の若手歴史学者であり、筆者にとって同世代の心強い研究仲間である。今回の書評からも多くの知見を得た。紙幅の都合もあり、時間を要するものもあるので、ここでは原氏が指摘された4つの特徴と3つの疑問点に絞ってリプライを試みたい。

まず本書の特徴については、(a) 遍路される側の視点、(b) 研究手法の修練、(c) 乞食遍路の対象化、(d) 文化史的領域への接続の4点をあげられた。(a)(c)(d)は本書の核を形成するものである。的確な読解と過分の評価に、著者として喜びを感じる次第である。

(b)については、こと歴史学者である原氏が一定の評価をされたことに特別の思いを抱いた。三田の社会学研究科博士課程の門をくぐる以前、筆者はSFCに在籍していた。そこでぶつかった壁が近世史料であった。筆者の主たる関心は、聞き取りという民俗学的手法が成立する近現代の四国遍路にある。だが、その理解には近世遍路の知識が不可欠と考えたし、過去帳を閲覧する機会にも恵まれたことから、専門外の歴史史料を扱う必要がどうしてもあった。幸いなことに、三田では磯田道史先生より近世文書の読み方の手ほどきをうけることができた。もちろん、門外漢の付け焼き刃ではあるが、修士での挫折をなんとか乗り越え、3,4章を書くことができた。過去帳と行政文書などから紡ぎ出した近世遍路像を対比することで、近代に＜分類＞という近代的論理に即した遍路認識が成立したことを、より効果的に提示できたのではないかと考えている。こうした事情から、歴史学からの視線と批判を常に意識していただけに、原氏のコメントにはやや胸をなでおろす思いである。

また原氏は疑問点として、(1)用語に振り回されている感のあること、(2)5章の結論で大師信仰を持ちだしたことが当初の目的と矛盾するのではないかということ、(3)誤植の多さの3点を提示された。

(3)については汗顔の至りである。校正は徹底したつもりではある。だが、なにぶん初めての出版で戸惑いも多く、不備の多いものとなってしまった。この場をお借りして、拙著を手にとって下さった方々にお詫び申し上げるとともに、今後は改めて徹底したい。

(1)も真摯に受け止めたい。博論提出から3年、本書刊行から1年が経過した現在でも、とにかく夢中で書き上げたという感が強くある。そのため、いくつかの用語を、汎用性や応用可能性の検討が希薄なまま提示してしまったと反省している。今後の糧とすることを誓いたい。

ただ、(2)の指摘については、筆者は矛盾と考えていない。本書で描きたかったのは接待の重層性と可変性である。確かに、現在の語りに弘法大師の言及はほとんどなく、接待の動機が大師信仰で覆い尽くされることはあり得ない。原氏がまとめられたように、儀礼化し、ルーティン化し、乞われる故に与える半ば義務的な接待こそが日常的であった。だが、ルーティン化した接待も、信仰の次元と繋がる可能性を常にはらむ。繰り返される実践のなかで、ごくたまに接待者の心に深く刻まれる出来事が体験されることがある。その体験の深い意味を読み解いていく中で、埋没した信仰的次元が活性化することがありうるのだということを、5章6章では描きたかった。この点を強調するとき、とりあげた事例が、いずれも宗教や信仰の次元に最終的に近接するものであったことを思い出していただけるのではないだろうか。ブルデューのハビトゥス論で移調可能性を強調したことも同様だ。もし本書において、こうしたモデルが十分に提示できていなかったとすれば、それはひとえに著者の責任である。本書評で課題を認識できたことに感謝したい。

最後に。思いがけず原氏が昔語りをされたので、筆者も当時を思い出し、懐かしい気分になった。SFCでの指導教官であった梅垣理郎先生のご紹介で、宮家準先生の研究室を訪ねた日のこと。そこで、学部1年時に履修した「文化人類学」を講義された鈴木正崇先生に再びお目にかかったこと。その後、宮家・鈴木研で拙い修論を発表させていただき、幸いにして鈴木先生にご指導いただけることになった。爾来、かつて諏訪の御柱祭についての不出来なレポートを提出した学生がここにいることを、鈴木先生はよもや覚えてはいまいという懸念を抱きつつ、8年の歳月を経て世に出たのが本書である。日本史専攻の授業を聴講することをお許しくださった磯田先生にも、この場をお借りして御礼申し上げたい。諸先生方から賜った学恩と原氏の友情に改めて感謝の意を表しつつ、筆をおく。

(あさかわ やすひろ 埼玉県立大学保健医療福祉学部)